

# ④ 横浜市三殿台考古館

今井康博

## 一 はじめに

約二〇〇〇カ所を越す原始・古代の遺跡が発見されている横浜地域は、県内でも有数の遺跡密集地として知られている。ところが、昭和四十年代からの大規模な宅地開発工事などによって、それらの多くは急速に失われつつある。横浜市三殿台考古館（以下「考古館」と略称する）設立の発端となった三殿台遺跡は、そうしたなかにあつて、国の史跡として保存された極めて数少ない遺跡の一つである。当時としては画期的な成果をあげた発掘調査と、時代の先端をいく保存技術に基づいて設計、建設された考古館は、全国的にも高い評価を受け、今日各地に多く存在する「野外博物館」の先駆的な役割を担ったのである。

昭和四十二年に考古館が開館して二十年が経過したが、この間五六万人の入館者を数え、館の利用形態も開館当初とは大きく変化してきて

いる。ここで、いままでの経緯と問題点、そして今後の課題を述べることによって、現代における博物館の多様なあり方の一端を紹介できればと思つている。

## 二 考古館設立の経緯

### ① 画期的な発掘調査とその成果

三殿台遺跡は、横浜市磯子区岡村四丁目一番地二二に所在し、東京湾をのぞむ標高五〇メートルの小高い独立丘状を呈す台地上にあり、面積約一万平方メートルの広さがある。この遺跡は、すでに明治年間から縄文時代の貝塚が存在する場所として研究者の間では知られていた。ところが、その後いくたびかの小発掘がくりかえされた結果、台地の縁辺に点在する貝塚の多くが次第に破壊されるようになってしまった。

昭和三十年代前半に、隣接する市立滝頭小学

- 一 はじめに
- 二 考古館設立の経緯
- 三 施設のあらまし
- 四 考古館の活動状況
- 四 学校教育とのかかわり
- 六 これからの考古館

校岡村分校（当時）の校地拡張のため遺跡のほぼ全域が削平されるという計画がだされた。そこで、昭和三十三年・三十四年に横浜市立大学史学研究室による予備調査を経て、翌三十六年夏に本格的な発掘調査が五〇日間にわたって展開されたのである。この本調査は、和島誠一氏を責任者とする三殿台遺跡調査団によって行われ、研究者や学生ばかりでなく、地元の婦人会、PTA、青年の会、中・高校生など多くの市民の参加、協力があつた。

発掘調査によって、縄文時代から古墳時代の竪穴住居址約二五〇戸（縄文八、弥生一五一、古墳四三、不明五〇）などの遺構のほか、膨大な量の土器・石器・金属器などの遺物が出土した。ほぼ当時の地形のままである台地全域を発掘調査したことによって、縄文から古墳にいたる各時代の集落の全容が明らかにされたことは、当時としては全国的に初めてのことであつた。とりわけ、重要なのは弥生時代のあり方

で、初期農耕集落の構造をめぐってさまざまな問題をなげかけたのである。

## ② 遺跡の保存整備と考古館の開設

全面調査によって明らかにされた三殿台遺跡の学術的価値が、極めて高く評価されたことにより、国の文化財保護委員会、考古学界、世論などは発掘直後から市当局に対して遺跡の保存を強く要望した。それを受けて、横浜市が保存を決定したのは、昭和三十八年春のことであった。そして同年、市は諮問機関として「横浜市三殿台遺跡保存協議会」（以下「協議会」と略称する）を設置し、遺跡の保存事業にとりかかったのである。

協議会は、学識経験者、地元代表、各関係行政機関職員など計三〇人の委員で構成され、併せて、考古学・建築史学・保存科学・博物館学などを専攻する委員からなる専門部会を置いた。昭和四十一年十二月までに二回の全体協議会と八回の専門部会を開催し、遺跡の保存方針と各種施設的设计などについて検討し、その結果を当局に答申した。検討結果は、おおよそ次に述べる通りである。

① 学術資料としての現状保存を整備の第一の目的とする。

② 学校教育の教材・一般市民の観光資源とし

て活用され、本市における文化財の研究センターとしても利用できる施設とする。

③ 整備工事は、三カ年計画で行い、昭和四十年中に開館とする。

④ 三殿台遺跡における原始・古代の生活と文化を理解させるために、復元住居・住居跡保護棟・遺構標示石柱・資料展示室などの諸施設・建物を造る。

この協議会の審議と並行して、市教育委員会は、整備工事にとりかかった。途中で曲折はあったものの、当初の予定通り昭和四十二年一月三十一日に「横浜市三殿台考古館」として開設され、原始・古代集落址の野外博物館が誕生したのである。なお、前年の四十一年四月二日に三殿台遺跡は「称名寺境内」に次いで市内では二番目の国史跡に指定された。

## 三 施設のあらまし

三殿台遺跡の様子をさまざまな角度から理解できるように、以下に述べるような諸施設、建物を作り、公開している。

### ① 考古館本館

鉄筋コンクリート造り、一階一二二平方メートルの規模で、展示室と収蔵庫に分れている。

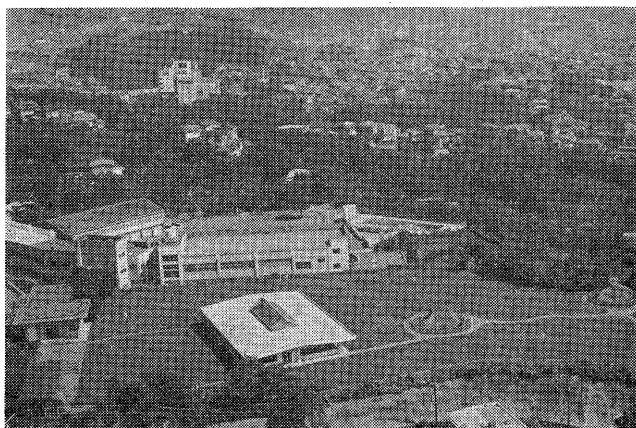
展示室は五六平方メートルの広さである。三殿台遺跡の出土品を時代順・機能別に配置し、壁には遺跡発掘時の航空大形写真を掲示している。その他、補足説明資料として市内各遺跡の資料も展示している。展示の主眼は「三殿台遺跡の人々は、どのような道具を用いて生活していたのか」を理解させることにある。

収蔵庫は、六六平方メートルあり、遺跡の出土品が収められている。当初は出土資料の検索が容易であったが、昭和四十年代後半以降、市内各地での学校建設などに伴う遺跡の発掘調査が活発となり、それらの出土品が順次運びこまれて、現在では立すいの余地がないほど煩雑としている。公開はしていない。

### ② 復元住居

縄文・弥生・古墳時代の復元住居が各一軒ずつ建てられている。いずれも発掘によって掘りだされた堅穴住居址のうちティピカルなものを選んで、それらの実測図をもとにして実大の復元模型とした。外形だけでなく、住居内部の構造もわかるように出入りを可能にした。ここでの意図は、「当時住んでいた家は、どんな形で、どんな仕組みをもったどれくらいの大きさのものであったのか」を理解させることにある。

写真—1 空からみた横浜市三殿台考古館

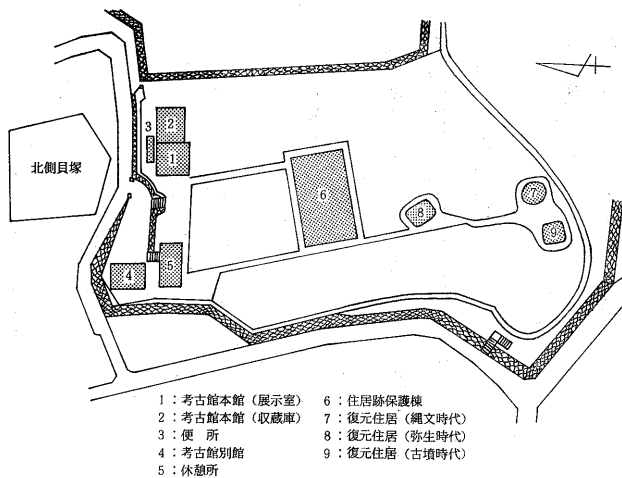


⑤—住居跡保護棟

発掘当時の竪穴住居址が、ほぼそのままの状態で、ガラス窓越しに見学できる施設である鉄筋コンクリート造り、四三二平方メートルの覆屋内部には、弥生時代の竪穴住居址七戸が樹脂加工されており、単独のものと同重なり合ったものがある。ここでの意図は、「発掘当時、どんな状態で竪穴住居址が発見されたのか」にある。

④—遺構標示石柱

図—1 横浜市三殿台考古館現況図



発掘された大部分の竪穴住居址を主体とする遺構は埋め戻されたが、それらの位置、規模、形状を示すために、その輪郭に沿って時代・時期別を示す色タイルを貼付したコンクリート製の石柱を埋設したものである。この意図は、「縄文・弥生・古墳それぞれの時代の遺構が、どれくらいの大きさで、どんな形をして、どのような分布のあり方を示しているのか」ということにある。

⑤—考古館別館

管理事務所と資料保管倉庫がある。鉄骨プレハブ造り、二階延べ一五〇平方メートル。管理事務所は一階にあり、パンフレットの配布、質問の応対などを行っている。また文化財課や考古館に寄贈された全国各地の考古学関係の図書約一万数千冊が、整理分類し納められている。

四—考古館の活動状況

考古館の事業については、昭和四十一年十二月十五日制定の「横浜市三殿台考古館条例」の第二条で、次のように定められている。

- (1) 三殿台遺跡の保存及び研究並びに入館者の観覧に関すること。
  - (2) 市内の遺跡の出土品及び考古学上の資料の収集、整理、保存、研究、及び展示に関すること。
  - (3) 市内の遺跡の案内書、解説書、目録、研究報告書等各種の印刷物の作成頒布に関すること。
  - (4) その他教育委員会が必要と認めること。
- 以上のような事業内容は、本来的な意味での『博物館』の機能である「資料の収集」「資料の整理・保存」「調査・研究」「教育普及」のすべてが該当すると考えられるが、現状では職

員構成や予算等の問題から、十分にそれぞれの機能を果たしているとはいえない。

## ① 職員構成

最初に、考古館の活動を支える職員の構成について述べてみよう。

当館に勤務する職員は、館長・事務吏員・技能吏員の計三人である。館長は民俗資料を対象とする横浜市八聖殿郷土資料館の館長も兼務しているため、当館に常勤ではない。事務吏員は、管理・運営のための庶務経理事務のほか、団体見学者の説明、収蔵資料の貸出しや専門的な問合わせなど、応対、館報の編集、学芸員実習生の指導など、いわゆる学芸員としての役割も担当している。技能吏員は施設の維持管理に伴う種々の業務を担当する。

なお、年間の予算は数百万円程度で、それらの多くは施設の維持管理費に使われており、一般の博物館で計上されている、資料収集費や調査研究費については、特別な場合を除いて措置されていない。

## ② 普及・啓発活動

### ⑦ 館報「大むかしのよこはま」の発行

原始・古代における横浜の歴史について、小学校高学年でも理解できるように編集した小冊

子である。昭和五十五年度から発行し、現在一号を数える。執筆は、市立小学校の三人の教師が中心になって担当している。イラスト、写真を多数掲載し、表現はできるだけ分かりやすい方法を用いている。市立小学校の六学年各クラスに一部ずつ、他に図書館などの公的機関に配布している。副教材として用いる学校が多く、また、既刊号の在庫の問合わせが多く寄せられている。

### ④ 特別展の開催

本館展示室では、前述したように常時三殿台遺跡の出土品などを公開しているが、不定期に収蔵資料のなかから選択して特別展を開催することがある。最近では、昭和六十年六月―八月に「朝光寺原古墳群の鉄器展」を催した。これは、昭和四十三年に発掘した緑区市ケ尾町所在の当該古墳群から出土した甲冑・刀剣・鏃などの鉄製の武器武具を一括展示したものである。市の広報誌などを媒介に開催の周知に努めたので、常設展を上回る入館者があった。

特別展の開催は、館の性格上、固定的になりにがちな資料展示に柔軟性を持たせることになり、今後も随時行っていきたい。

### ⑧ 館外における活動

当館の性格は、前述したように三殿台遺跡の野外博物館であるため、条例で定められている

市内の遺跡に関する普及・啓発活動（刊行物の出版を除く）については、本館展示室の狭隘さとあいまって館内で行うことはなかなか困難である。そこで、公共施設のコーナーを借りて市内の遺跡からの出土品の展示を実施している。

### (ウ) 市庁舎市民広間の文化財資料展示

昭和五十四年から昭和五十八年にかけて標記場所で、五つのテーマに分けて開催した。当初、「みなと祭り」の協賛事業として始められたもので、地域の文化財の紹介を通してその愛護意識の啓発・高揚をはかる目的で実施された。

### (イ) 区役所などにおける展示

各区の庁舎や公共施設に、区域あるいは市域の遺跡の出土品などを展示したケースを常設している。昭和五十二年頃から設置しはじめ、現在、中・港南・泉区を除いた一三区に置かれている。

### (ウ) 小学校の郷土資料室の展示協力

最近、児童数が減少する小学校においては、空いている教室を郷土資料室として利用するところがある。ここでは、学区内やその周辺からの考古資料や民俗資料を展示し、社会科学習の教材として活用している。当館では、学校から要請があれば、資料の収集・展示についての指導・助言をしており、場合によっては当館所蔵の資料の貸出しも行っている。最近では、昭和

六十年度に瀬谷区瀬谷小学校、同六十一年度に南区別所小学校などで実施した。

このような小学校に郷土資料室や郷土資料コーナーの設置は、年々増加の傾向にあり、当館としても積極的に対応していきたいと考えている。

### ⑤—資料の収集と整理・研究活動

#### ⑦資料の収集

資料の収集については、收藏スペースや予算措置などの問題から、系統だった活動は行っていない。ただ、公共事業に伴う発掘調査による多くの遺跡の出土品を保管しており、発掘担当者の承諾を得て、それらをいかに効果的に活用するかが今後の課題といえる。

また、市民から考古資料の寄贈や寄託を受けることがある。その一例として、昭和五十七年に鶴見区の横山金吾氏より、「人面付土器」が寄託された。この土器は、その後、県指定文化財の指定を受け、現在は鶴見会館のロビーで展示公開されている。

#### ④資料の整理・研究

現在、当館の活動で最も立遅れている分野である。

三殿台遺跡の発掘調査報告書は開館の前年に刊行されたが、それには、土器の一部と石器、

金属器、骨角器などについての記述が収録されていない。開館後、事業の一貫として、それらについての整理、分類を行い、その成果を昭和四十五年度から逐次、『収蔵品目録』として編集し、現在までに五冊を発行した。

### 五—学校教育とのかわり

昭和六十一年度の入館者は、総計三万四八四四人を数えるが、このうち小学生は二万五五六〇人で全体の約七三%という極めて高い割合を示している。そして、この小学生のうち約七六%の一万九四〇〇人が、六年生の社会科授業の一環として学校単位で当館にやってくるのである。来館時期は、原始・古代を学習する頃、即ち四月中旬から五月上旬に集中し、多い時は一日に一〇数校が訪れるという盛況振りである。

ここでは、こうした小学校団体見学者が、当館をどのように利用しているのかについて紹介してみよう。なお、記述の多くは、当館に本年四月中旬から五月上旬に来館した小学校団体見学校八〇校の、引率教員を対象としたアンケート調査によるところが大きい。

### ①—団体見学小学校の数

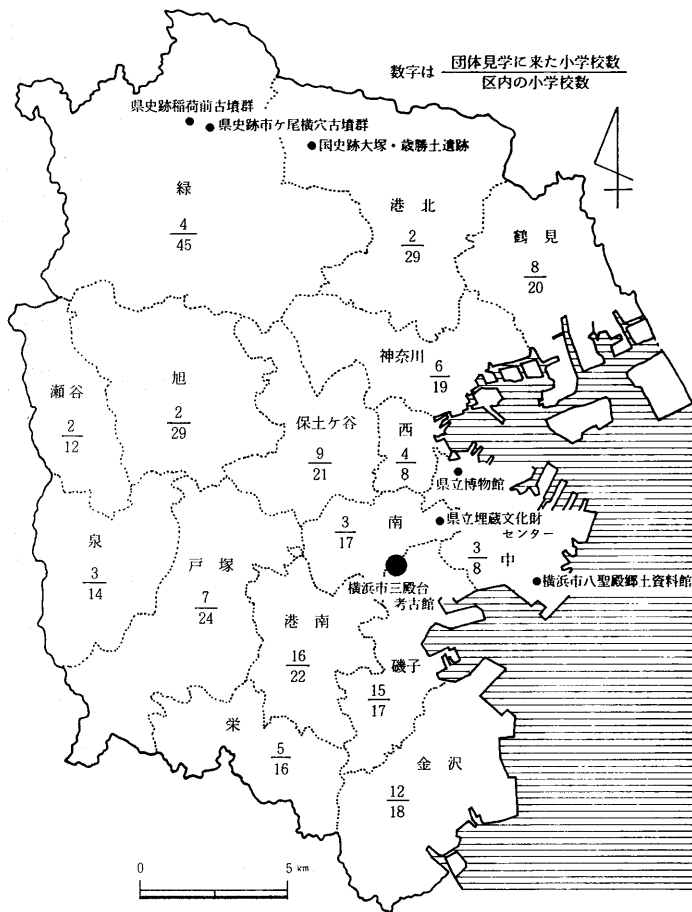
昭和六十一年度は、市立小学校一三八校、市外の公立小学校一七校（鎌倉市立七、横須賀市立五、逗子市立三、藤沢市立一、大和市立二）、その他三校（市内国立二、同私立一）の合わせて一五八校が来館した。市立小学校は、全体で三一九校をかぞえることから、その四三%を占めており非常に高い割合と言えよう。また、市外の公立小学校も年々増加の傾向にある。市内の各区別の状況は図―2に示したように、中南部の区からの来館校が多く、西・北部ほど少なくなっており、当館に近い区域ほど利用度が高いといえる。

### ②—交通機関と見学時間

各小学校から当館までの交通機関は、アンケート調査によれば、徒歩のみ一六校、貸切りバス・乗合バス各二校で、他は京浜急行や市営地下鉄などの鉄道を利用して来る。徒歩のみや乗合バスの利用校は当館から近距離にある磯子・南区などの学校である。貸切りバスが予想以上に少ないのは、当館に大型バスの駐車場が備わっていないこと、交通機関が充実している市内の移動であることなどの理由によるものだろう。

当館での見学時間は、一時間の学校が二四校と最も多く、次いで二時間の学校が一七校、一

図一 2 昭和61年度団体見学の区別市立小学校数



時間三〇分の学校が一六校、二時間三〇分の学校が七校、三時間の学校が七校という順である。なお、昼食をとる学校は全体の約三割である。

③ 事前学習

ほとんどの学校が、その内容の差はあれ、当館見学前の授業で三殿台遺跡と考古館の概要、原始・古代生活と文化についての学習がなされているようである。

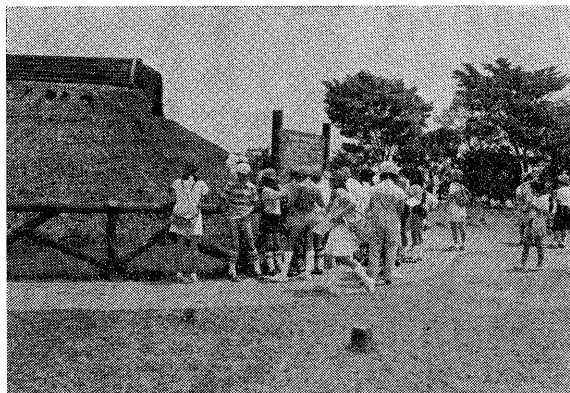
教科書の中には、三殿台遺跡について詳しい記述のあるものも出版されているが（「小学社会小六」日本書籍発行）、市内の学校では用いられていない。従って、三殿台遺跡の説明に当たっては下見の時に配布した当館のパンフレットを用いた学校が大半で、なかには、学校独自で製作したスライド・VTRあるいはTVで放映した「三殿台遺跡を訪ねて」などの番組のVTRを使って指導したところもある。

④ 児童たちの感想

児童が当館を見学して、どのようなことを学び、そして疑問に思ったのであるのか。アンケート調査の結果から、いくつかを紹介してみよう。

多くの児童が、自分たちの身近なところにも、教科書で学んだ遺跡があることに大きな驚きを示し、その場所が日当たりのよい小高い丘の上につくられていたことを、自らの観察によって確かめている。そして、飲料水の入手方法や、水田の位置などへ問題を発展させている。

施設のなかでは、復元住居に最も関心が集まったようだ。なかに入って、柱の本数をかぞえたり、屋根のかやに触れたり、その暗さに驚いたりして、自分たちの生活空間では目にすることのできない、古代住居に魅せられていたようだ。また、展示室では縄文土器と弥生土器の違いや、道具の種類を実物によって確かめ、石器や骨角器を使って、どんな食べ物をどれくらいとっていたのか、という疑問に発展させている。なかには、昔の人は器用だったとか、おしやれだったという感想をしめす児童もいる。そして、遺構標示石柱では、三時代にわたって多くの住居が作られていたことを、タイルの色違いや柱の数によって理解したようだ。



⑤—博物館と学校教育

一般的に、博物館は、学校教育を受けている児童・生徒・学生だけでなく、幼児から老人にいたるまでの年齢・学歴・職業などを限定しないすべての人間を対象としているのであり、そうした観点にたつての展示、公開内容でなくてはならないと言われている。いわば、学校教育・社会教育・生涯教育といったすべての教育に適合した機関でなければならぬはずである。ところが、利用者の実態は、館の種類によって大きくことなっている。たとえば、美術館や専門館では成人、動物園や科学館などはむしろ幼

児や児童・生徒の利用が多数を占めているのであり、館活動の在り方もそうした利用者の実態によって規制される部分がかんり生じているようである。当館の場合、前述したように小学生の利用者が全体の七割以上を占め、その多くが歴史授業の一環として来館してくるのであり、学校教育との関係をより強固にする必要がある。当館の今までの活動経過を振り返ってみると、そうした必要性を感じながらも、小学校の団体を単に受動的に迎えていたように思われる。これからは、児童・生徒はもとより、引率の先生方の意見や要望なりを、積極的に取り入れ、効果的な館活動に当たっていききたいと考えている。

六—これからの考古館

①—再整備事業

当館は、今年の一月三十一日で、開館以来二十年が経過した。この間、社会科学授業の一環としての小学校団体見学者の増加や、社会一般の原始・古代に対する関心の高まりなど、館内外の状況は、開館当初には予想もなかったほどの変わりかたである。ところが、当館の施設や建物は、今までに増改築などはなされず、概略開館当初の施設構成を保持している。むしろ、二十年が経過したことによって、考古館本・別

館など一部の建物の老朽化が目立ちはじめている。また、こうした施設や建物の他に、考古館の管理・運営や普及・啓発といった具体的な館活動のあり方においても、現在の状況にそぐわない部分が生じている。

このような現状をいくらかでも打開し、将来に向けて、望ましい博物館施設とするために、昭和六十一年度より『横浜市三殿台考古館再整備事業』を始めたのである。そして、その初年度事業として、現状における問題点の洗い出しと、それに基づく再整備の基本方向について検討するための諮問機関として「横浜市三殿台考古館再整備検討委員会」（以下「検討委員会」とする。）の開催を実施したのである。

②—再整備の基本方向

検討委員会は、考古学・博物館学・建築学・学校教育などの学識経験者と、文化財の關係行政機関職員の合わせて五人で構成され、昭和六十一年七月から翌六十二年二月までの間に計五回の会議を開催した。つぎに、検討委員会の会議内容の概要について述べてみよう（以下、横浜市三殿台考古館再整備検討委員会『横浜市三殿台考古館再整備の基本方向について—報告—』昭和六十二年三月より抜粋）。

⑦再整備に当たっての基本的考え方

今後、再整備を実施するに当たっては、

- ① 三殿台遺跡の発掘成果を生かした野外博物館（フィールド・ミュージアム）を基本とする。

- ② 学校教育との連携を、より以上に強化する。

という二点を念頭において進める必要がある。

- ④ 施設と建物の整備について

- ㊦ 考古館本館と別館

両者を一体化した建物とし、学習室、研究室を新設するとともに、展示室・収蔵庫の拡張を図り、博物館施設として適正規模の建物へ改善する。特に展示内容は、小学生でも当時の生活の様子が容易に理解できるように工夫する。

- ㊧ 住居跡保護棟

カビ・コケ類の繁茂や遺構面の崩落が見られることから、専門家による科学的な検査・研究を実施した後、保存処理をはかる。また、遺構の観察が容易となるよう建物の改善を含めて検討する。

- ㊨ 遺構標示石柱

石柱の間隔が大きいので個々の形状などが分

かりにくく、コンクリート製のため危険であることから、標示物の材質・設置方法を改善するとともに、高所からの展望が可能となる施設を新設する。

- ㊩ 北側貝塚

北側貝塚は、東日本では稀有な弥生時代の貝層の存在が予測されているが、内容・規模などを確認するための発掘調査を実施し、その成果に基づいて公開・活用などの整備を検討する。

- ㊪ 館活動その他の改善などについて

- ㊫ 普及・啓発活動

○ 三殿台遺跡の発掘成果に基づいたガイドブックと収蔵資料品目録を作成する。

○ 発掘時の全過程を撮影したフィルムを取得し活用を図る。

○ 体験学習の開催や友の会の設立を通して、館活動の活性化を図る。

- ㊬ 学校教育との連携

小学校団体見学者の増加に対応するため、学校教育との関係について充実をはかる。

- ㊭ 休館日と開館時間

現状の休館日と開館時間は、県内の同種施設

と異なっており、利用者の不満も多いため、できるかぎり統一されたものに改めることを検討する。

- ⑤ 将来に向けて

以上、市内で唯一の野外博物館である考古館の概要について、沿革、施設、活動、学校教育とのかかわり、再整備の方向などに分けて述べてきた。さまざまな問題を抱えながらも、現実には博物館を訪れる人は年に三万数千人といふかなりの数にのぼっており、市民の文化的な創造力をうみだす大きな原動力の一つとして、博物館が活用されていることは、否定できない事実である。当館の組織や予算がどうであれ、実際に来館する人々の知的欲求に十分こたえうるだけの体制が整っているかどうか、はなはだ疑問とせざるをえない。そうした意味においても、検討委員会から答申された各項目について、早期の実現をめざすことが、当面の私たちに与えられた課題であると考えている。

△ 教育委員会文化財課横浜市三殿台考古館▽